

## 『電気之友』誌にみる九州の電気事業（VII）

東定, 宣昌  
第一経済大学

<https://doi.org/10.15017/13637>

---

出版情報：エネルギー史研究：石炭を中心として. 7, pp.110-113, 1976-10-15. エネルギー史研究会  
バージョン：  
権利関係：



# 『電気之友』誌にみる九州の電気事業 (VII)

東 定 宣 昌

今回は引続き「しげのり随筆」(第四)を紹介する。即ち明治三十四年一月十四日から十六日にかけての福岡、佐賀、長崎の旅行記にあたる。加藤木重教は中略した部分において、十四日は福岡電話交換局福岡郵便電信局を訪ね、東公園、西公園に遊び、十五日には佐賀県小城郡別府町の故志田林三郎家を訪ねている。それは「抑余が今回の旅行たる、一は九州電気事業の実況を視察せんとするにありたるは其目的重なる者たるには相違なかりしも、一は亦本年は故志田博士の十年祭に相当するが故に、聊か追悼の微意を表せん為、親しく博士の遺族に就きて博士の郷里にありし幼少の時代より、果ては上京するに至るまでの実歴を聞かんとしたりしも亦新年早々旅行を思い立ちたる一因にてあ」つたためである。さらに十六日長崎においては長崎電話交換局、長崎郵便電信局、北部電信会社を訪ねている。

福岡市 一月十四日曇、早朝先つ福岡電話交換局に到り、局長岡本桂次郎氏を訪ふ、氏は公用にて熊本へ出張中なりとて、同局技術課長碓井忠治氏出て来り、余の為めに先つ福岡市の地図を展べ、就て博多と福岡との区別より東西公園其他名勝の方位等に至るまで、懇々巡覧

の順序を指示せられたるは余の深く感謝するところなり(中略)  
 博多電灯株式会社 那珂川の中洲にある同社に到り、先つ支配人島田浅太郎氏に就きて同社営業上の実況を問ひたるに、現今の灯数は二千九百個にて、昨年下半年の配当は年一割五分なりき、且つ此地方特産の石炭は切込炭十九円、上等塊炭二十二円位なりと答へぬ。同社汽缶室は煉瓦造なれども発電機室は木造にして、特に余の目を惹きしは室内掃除の最も行き届き居るの点にてありき、同社にては昨年已に増設工事を了へたる為め、目下新旧数個の器械あり、而して増設に係るものは悉皆舶来品にて、東京丸の内高田商会の供給なりと云ふ。今同社備付の新旧機械を見るに大凡そ左の如し

博多製ランカッサボイラ	三台
磯野鉄工所製	—
井村製	—
渡辺製	—
パップコック、ウエルコックスボイラ	一台
芝浦製作所製コンボンド、エンジン	二台
アイデアル、コンボンド、エンジン	一台

芝浦製単相式 二千ボルト 発電機 二台  
 三十アムペア

ウエスチングハウス単相式 二千二百ボルト 百廿「キロワット」  
 回転千回

発電機 一台

ウォーシントンポンプ等

配電盤にはトムソン、ワットメートル 其他皆備れり

最初リングベルトを使用せしに、一ケ年ならずして切斷せしかば、今日  
 は大阪新田のエレクトリック、ベルトを使用し居れり、且つ構内に貯  
 水池二個ありて、一をコンデンサー用水とし、他を気缶用とす、煙突  
 は丸形煉瓦造一個、

汽機・発電機等と洋品の優劣に付ては決して軽々に論評し能はざるの  
 みならず、凡て設計者と起業者との協議上時の事情に応じ、彼我を酌  
 量して採用するものなれば、其代価の如きも勿論分明ならず、特に傍  
 觀者の無責任談、素より無用なれども、永く和製品を以て苦しみたる  
 後、俄に舶來品を取扱ふ時は其優劣一目瞭然たる心地するは明かなり、  
 之れ瑣事に似たりといへども、エンジン、コンデンサー等の要部注油  
 の工合等を見るに、和製は床の上油を以て充され居るも、舶來品には  
 一滴の油すら漏れずといふも更に不可あるなし、  
 其他運転の調子と云へ、発熱の加減響きの高低といへ、同室に併置  
 して比較せらるゝ時は如何に御国最負の眼を以て見るも、尙ほ和製の  
 洋製に及ばざるの点多しとは最も遺憾とする処なり

博多電灯株式会社点火規則

点灯需要者の便利を図りて電灯を左の四種に分ち居れり

一 半夜灯 日没より午後十二時迄点灯するもの  
 一 三時灯 日没より午前三時迄点灯するもの  
 一 終夜灯 日没より日出迄点灯するもの  
 一 街灯 街路へ臨時軒先へ終夜点灯するもの

白熱燈点燈料一ヶ月に付

電燈種類 燭光種別	半夜燈	三時燈	終夜燈	終夜街燈
拾 燭光	壹円拾錢	壹円參拾錢	壹円四拾錢	壹円參拾五錢
拾六 燭光	壹円參拾錢	壹円六拾錢	壹円七拾五錢	壹円七拾錢
貳拾五燭光	壹円八拾五錢	貳円貳拾五錢	貳円五拾五錢	貳円五拾錢
參拾式燭光	貳円參拾錢	貳円七拾五錢	參円拾錢	參円
五拾 燭光	參円五拾錢	四円拾錢	四円七拾錢	四円五拾錢
百 燭光	六円	七円拾錢	八円	七円八拾錢

弧光燈点燈料一カ月に付

燭光	終夜燈
千式 百燭光	貳拾円

式拾燈以上の需用家には「メートル」式の需に應ずることあるべし

(中略)

福岡病院

九州の模範病院にして東公園松林の間にあり、外觀壯大といふにはあらざるも、院内の清潔、非常用具、灯火、用水、諸器械

の整理、名医の充実等、殆ど全国の県立病院中其比を見ざるところなりと称せらる、余は先づ同院電気主任宮本左三郎氏の紹介にて刺を同院長医学博士大森治豊氏に通じたるに、数十分後快よく出で来りて、博士自ら院内巡視案内の勞をとり、且つ諸般の説明をも与へられぬ、蒸気管と水管とが独り縦横に各室を接続し居るのみならず、電灯、スチーム、ヒーターの如きも亦悉く各室に行き渡り、院内には電話交換所の設けさへあるか故に、重なる部室三十余ヶ所と自在に通話し得るの便利ありと云ふ、進んで一隅の治療室に至るや、院長自らスウェッチを左右し、以てX光線の実験を示さる、蓋し之に使用するところのインダクション、コイルは四十五「センチメートル」のスパークを發出するに足るものなりと称せらる、更に別室に至れば、曾て院長が独逸にて買求められたりと云へる W. A. Hishmann 製小電気モートルも亦之れあり、而して此電気機は回転すべきアーマチュールの尖へ治療用鋸、鑿錐等をはめ換へ、以て患者の骨を切断削除修飾等の場合に使用さるゝものなりと云ふ、更に又別室に至りたるに、此処には院内に於ける患者用担架車とも云ふべきものに自転車のゴム輪をはめて震動を妨きたるもの杯(杯)も備へありき、之れ又大森院長の創作に成れるものにして、其他斯道に益せられたるもの頗る多しと聞く、院内又発電所二ヶ処あり、一は旧発電室にしてエジソン六号発電機一台あり、今日は之をX光線用に供す、而して新発電所にはエジソン十二号発電機一台を据付(発電機は元三吉電機工場、汽機は芝浦製作所製、汽缶はランカシャ形にて門司製鉄所製なりと)、三百灯程の電灯を点火し、之にリングベルトを使用す、其他ウォーシングトンポンプありて高さ水槽たんくに水を吸みあげ、以て院内の用水に供す、発電所内の如き掃除最も行

き届き、恰も一の営業発電所の如く、配電盤其他附属品一とつて備はらざるはなし、之れ畢竟するに主任者其人を得たるによらずんばあらず

(中略)

長崎電灯株式会社 船舶発着の個所は何所も前に海湾を受け後に山を負ひ、殆ど地理学上自然の約束ともいふべきに似たり、即ち長崎市街の如きも馬関の如く平坦の地に乏しく、総て頭上に墓石を見ると云ふ有様にて、電灯会社の如きも少しく山の方に登るべき口元にあり、先づ同社技師柏木実太郎氏を訪ひ、発電所の一覽を乞ふ、汽機発電機室は木造、汽缶室は煉瓦造にして、事務所は構内の一隅にあり、同社開業の際より使用の発電機及汽機

米国トムソン单相発電機 三十五「キロワット」  
コムボジット 一千「ボルト」

米国ワードベリーエンジン附 一組

東京元三吉工場製单相発電機 五十「キロワット」  
一千「ボルト」

エンジン共 一組

昨年九月増設の分は

米国ゼネラル单相発電機 百廿「キロワット」  
式千「ボルト」 一台

米国スキナー、ノンコンデンシング、コンボウンド、エンジン 一台

新旧汽機四台内 二台は長崎製一台はウイドベリー製  
一台は石川島製

三台

ポンプ大小

丸形煉瓦造煙突 一個

汽缶室より煙突までの烟道は高さ二間の高きにあり

長崎の水道は尙不完全の所ありて折々中止する事さへありと云ふ、而して同会社の汽缶用水は三丁程先きより土管にて引き来り水料を払ひ居れり、石炭は二十六円位、リングベルトを使用せしが度々切断して殆ど困却を極むと称せらる、何れにて聞ても電灯用としては廉価にして不十分なるリングベルトは最も危険なれば充分注意すべきなり、現今白熱灯二千五百灯あり、遊廓のみにて凡四百灯を使用し居れり、アーク灯六個、外に市の負担にて十五個程点火することとなり、長崎電灯の他と異なる点は半夜灯として夜十二時限に消灯するの一事なり、右は市中營業の性質上よりか、又早寝の習慣あるが為か、終夜灯の需要少きものと見ゆ、然れども今日文明の灯火としては長崎に限り半夜灯として永く此儘に許すべくもあらざれば早晩世間並の營業となるに至らん乎、

(中略)

長崎立神三菱造船所 市とは湾を隔てゝ是亦向側に見へ、西泊貯線池の手前にありて、立神、飽之浦の二ヶ所に渉る、折柄雨益々烈しかりしも雨具の用意もなく、且つは日没ともなりたれば其辺の勝手不案内なる余には殆ど困却せり、余は先つ小船を止めて、直に同所長莊田平五郎氏を訪ふ(同氏は余の明治四、五年頃慶応義塾の童児局にありし時英学教師且つ童児局監督なりし恩師なり)、然るに氏は既に退出後の事なりし故、更に電気掛皆川春次郎氏を訪ねたるに、氏も亦病氣の為

め本日出勤せすとのことに、已むなく同所員にして昨午海外視察を了へて帰朝せられたる電気学会員浜田彪氏に面会を乞ひ来意を告げたるに快よく工場巡覧の案内を諾せらる、夜中の一覽なりし故只其結構宏大なりと評するの外なかりしも、僅に眼につきしは郵船会社の注文なりとて当時工事中なる長四百五十呎六千屯の加賀丸外一艘にてありき、此二船の如き、陸上にあつては中々に大なるものゝ如くなりき、其他海浜には大なる起重機の設計も亦之れありき、発電所にはエジソン十号発電機二台、ロンドン製百ボルト、十「キロワット」、汽機直結のもの一組(但し船舶用のもの)、アーク四十五灯用発電機一台を備へ、配電盤上の測定器、開閉器等実によく整頓し居れり、電機部にてはロジャ軍艦ミズスリーベルギー号、及ドイツ軍艦イレネー号とかの発電機、アーマチュールの修理中なるものをも亦見受けたりき、

工場内には電力を使用する筈にて、式五百ボルト、式百キロ、四百五十キロ等の発電機を海外へ注文せしよしなり、工場内には白熱灯は勿論、アーク灯も点せられぬ、工場内天井に移動起電機(電力)の仕掛ある場所にアーク灯を釣り下くるは佳なり面倒なりと思はる、目下職工の総数三千五百名もありて、中に四五名の外国人も亦之れありき、尙ほ昨今続々工場の新築中なれば、竣工の上は何れもエレクトリックモートルを応用するの計画なりといへり、

(後略)

(『電気之友』第一一七号 明治三十四年四月十五日)